

# 平湖鉞子書芸人に見る中国民間芸能の今

磯 部 祐 子

## I：平湖と鉞子書芸人

平湖は、上海の南に位置し、東北部は上海金山区、西部は嘉興に隣接し、南部は杭州湾に面する。もと「水と魚の郷」として知られていたが、今日では上海周辺の新興都市の例に漏れず、多くの企業が誘致されて工業都市と化しつつある。この、地理的には世界的都市上海に近く、経済的にはかつての貧困な農村から脱却しつつある地で、民間芸能（「曲芸」）は、古い姿のままで、宗教行事と深い関係の中に息づいていると再認識した。

小論は、一人の鉞子書芸人・徐文珠（1957-）の活動を通して、江南地方の民間における芸能の現況を報告しようと思う。

鉞子書は、説因果ともいい、平湖、嘉興、嘉善及び上海の松江、金山などで清代の道光年間頃より演じられた曲芸であるという<sup>1</sup>。説因果という呼称からして、本来、勧善懲悪的な内容、もしくは形式で、人々に分かりやすく説く説唱芸能であったと思われる。

「説因果」ということば自体は、この地域の明・清の地方志にすでに数例記載されているが、ほとんどは「理由を説明する」という意味で用いられていた<sup>2</sup>。ただ、『天啓海鹽縣圖經』巻之五<sup>3</sup>には「…共酣飲或其謳歌亦有假説因果唱和演義無故惹人百十…」と記され、ここに「假説因果唱和演義」とあることから、「説因果」ということばは本来ある種の娯楽性をもった語り

- 
- 1 鉞子書流行于平湖、松江一带乡镇、为当地居民喜闻乐见的民间曲艺，俗称“说因果”。中华人民共和国成立后改称为“农民书”。一般为职业艺人，有师承，也有半农半艺的。艺人左手执一铜钹，右手持一竹筷敲击，作为伴奏，有说有唱，大多为长篇演义，也有开篇、小段。至今仍在平湖乡镇流传。（今回の調査に同行していただいた張漢勇氏のメモに依る。）また、『中国戯曲曲芸詞典』（上海芸術研究所・中国戯曲家協会上海分会編 上海辞書出版社 1981）には、「鉞子書 也叫“沪书”。曲艺曲种。流行在上海的川沙、南汇、松江、青浦等地，清末即已形成。有西乡调和东乡调之分。西乡调以松江为中心，东乡调以川沙为中心。后者又叫“浦东说书”演唱者一至二人，有说有唱，唱词基本为七子句。演员以竹筷自击钹子掌握节拍，曲调简单，具有吟诵风格，句末略有拖音。…」とあり、『説唱芸術簡史』（文化芸術出版社 1988）にも簡単な説明がある。
  - 2 『光緒嘉興府誌』に「…日閱釋典一日在母前講説因果母曰汝既決志出家但無…」（著者：許瑤光修，吳仰賢撰 版本信息[清光緒五年刊本]）と見え、『光緒平湖縣誌』に、「…日閱釋典一日在母前講説因果母許其出家由是復剃度…」（著者：彭潤章修，葉廉鏐撰 版本信息[光緒十二年刊本]）と見える。（『彫龍中国地方誌全文検索叢書—シリーズ③中国地方誌-浙江省-嘉興市DVD-ROM』に依る）
  - 3 『彫龍中国地方誌全文検索叢書—シリーズ③中国地方誌-浙江省-嘉興市DVD-ROM』に依る。

として用いられてきたことも推測される。しかし、実際のところ、いつごろ、演芸としての形を備えたかについては、清末頃と推測されるものの、はっきりした資料はない。一方、平湖一帯では、「太保書」という祭祀にまつわる説唱活動が行われているが、この「太保書」から鉸子書は生まれてきたという説もある<sup>4</sup>。

今日鉸子書の演目としては、「三国」「呼延将三閭東京」などのいわゆる軍記物か、「白玉燕」などの才子佳人系が多く演じられている、と聞く。

鉸子書は「開篇（まくら）」と「正書（本題）」からなり、語りを主とし、唱をまじえて、「鉸子（ハツ、すなわち小型のシンバル）」を「竹篴」でたたいたり、「扇子」、「醒堂木（聴衆の注意を引くために机をたたく木片）」を用いたりする。説唱者は、机を前に、状況に応じて立ったり座ったりしながら、落語の「引言（ひきごと）」や「擲（くすぐ）り」ほどではないものの、聴衆の身近な話題を自由にさしはさんで語り、聴衆との距離感がきわめて近い芸能と言える。

今回調査対象とした芸人・徐文珠は、現在この一帯では唯一の鉸子書芸人であり、連日、農村の「做社（むらまつり）」を中心とした場で、活動を繰り広げている人物である。

そもそも、鉸子書は、民間において「廟会」「街頭」「茶館」などを渡り歩き演じられていたが、民国後期には主に「茶館」で演じられる娯楽性の高い演芸となった。その後、中華人民共和国成立後は、政府が社会主義中国を宣伝するため、県の文化館の主導の下で、民間の芸人集団を組織して演じさせた。しかし、文化大革命期になると、「破四旧」の運動の中で、上演の場所と機会はほとんどなくなっていき、改革開放後は、数人の芸人が確認されたものの、老齢や転職などによって、今日では徐文珠を残すのみとなった。

中華人民共和国成立後の1956年に、平湖県曲芸協会が成立した時、当時の代表的な鉸子書芸人であった徐阿培（1915－1987）が協会の主任となったが、その人物こそが徐文珠の父であった。文革後、徐文珠は、鉸子書の後継者が途絶えつつある現状を目の当たりにし、自らが鉸子書の継承者になることを決意した。徐文珠21歳のときである。

さて、今日再び、鉸子書の主たる上演場所となった「社」は、本来、土地神および土地神を祭る場所を指し、その祭りをもち指すが、祭りを執り行うこと、すなわち「做社」は、農繁期と炎暑の夏の日を除いて、浙江の農村なら年中どこかで目にすることができるといってよいだろう。この地域では、清末においても「秋分後戌日、爲秋社、醴錢爲會、牲醴賽神、以報豐稔」<sup>5</sup>と、収穫後に酬神のために、村人たちの醴金によって「做社」は行われていたが、

4 張玉観「平湖太保書」（『平湖文史叢談』所収 平湖市史志弁公室編 人民日報出版社 2005年）に、「曲調也简直平直，这就是平湖锣鼓书的前身。后来改用钹子敲击节奏，曲调逐渐如花，演唱比较自由，这就是钹子书的前身，而这种曲艺大都脱胎于太保书。」と記される。

5 『光緒嘉興府誌』（著者：許瑤光修，吳仰賢撰 版本信息[清光緒五年刊本]）（『彫龍中国地方誌全文検索叢書—シリーズ③中國地方誌-浙江省-嘉興市DVD-ROM』所収）に見える。

その伝統が今日まで生き続けているのかも知れない。以下に今回目にした、徐文珠が祭祀を取り仕切る「社」及び「落成廟会」を中心に、鉸子書芸能について報告する。

## Ⅱ：調査一 秋社

日時：2008年11月2日 8時開始

場所：平湖市新埭鎮大齊塘村九組

社：九組は49戸で一社（祭りを執り行う集団）を作る。

社頭：葛連根（旋盤工場経営）、朱照榮（退職労働者、もと乍浦車両ステーション勤務）

祭祀の対象：本廟の神案に招かれた神々、護国鎮海侯施王千歳、観音菩薩、如来佛

2008年11月2日、朝8時、徐文珠は、目的地に着くと、割合富裕な農家の三階建て家屋の1階で、神案（神を祭る台）を作り、神を象徴する紙の神碼を並べ供物を確認し、その日の社の趣旨を「社単」という赤い紙に記した。芸人は社の儀式全体を取り仕切る役目をも担うのである。「社単」に記された具体的内容は、この社が人々の安寧を願う「太平社」であること、社を主催する地区の名、奉る神々の名、社の代表及び醸金者の名前などである（写真1）。

太平社

今处浙江省嘉兴府平湖市秀溪乡新生村玖组。红期庙界  
□□□本庙佛祖 如来佛 大慈大悲 观世音 护国镇菩萨  
王千岁 本堂观音堂 观音菩萨等等大神  
起社人葛进□ 社头 朱照荣 葛連根

（醸金者29人の名は略す）

中华人民共和国公元貳零零捌年 拾月初伍 天开黄  
道吉日敬大神 永保太平年

この地の社は、1958年に一旦途絶えたが、2004年に平安と豊作を祈願にして復活したもので、今日では、毎年2回行われる。一社に要する経費は、各回平均2500人民元で、費用は、戸毎毎年100元の醸金によって賄われる。そのうちの大半は社に醸金した人とその家族に振舞われる食事代に費やされ、徐文珠に支払われた謝礼は200円であるという。

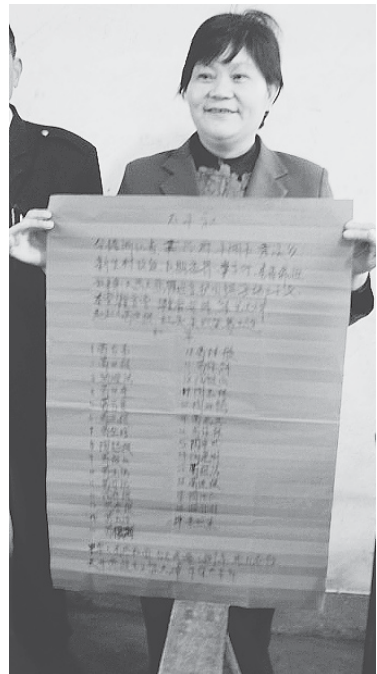


写真1 社単

社単を書き終えた後、徐文珠と社頭らは、社単に名が記された観音と護国鎮菩薩<sup>6</sup>が祀られた場所にバイクを連ねて出向き参拝した。再び神案の場所に戻ったのは、10時頃であった。

やがて、吉利話が始まり、爆竹の炸裂する音が響くと、供物を前に、「請神」（神を呼ぶ）行為が始まる。徐文珠は、神案が祀られた家の玄関に出て、外に向かって「請神歌」を歌い神を招く。神の名を呼びながらその手は神々を神碼へと誘う。人々は、徐文珠の神を招くしぐさと拝礼に従い、共に拝礼する。以下に、「請神歌」の具体例を記す。当日の様子は映像記録に収めたが、徐文珠によれば、その「請神歌」は、前出『平湖文史叢談』<sup>7</sup>に収められているものと同じであるということから、それを転載し、訳出する。

《請神歌》

〔开场白〕 混沌初开分天地, 盘古王制立乾坤, 化行尧舜汤文, 姜公斩将封神, 先出诸天三界, 后出五岳朝神, 传流敬圣保安宁, 福主虔诚, 鞠躬参拜—

〔唱〕 九霄云内殿门开, 一阵香风扑面来, 符官是, 相貌堂堂离紫府, 威风凛凛出天坛。

还请上界符官号天仙, 身骑龙马下凡间, 手执令字旗一面, 金盔金甲好威严。

《神を請う歌》

「開場の詞」混沌より天地初めて開き、盤古により乾坤を定めらる。堯、舜、商の湯、西周の文王により行動の基が決められ、姜太公は敵将を斬りて彼らを神に封じた。まず三界の神に、後に五岳の神に封じ、神を敬えば、安寧を保ち得ると広く伝えた。施主は謹みて神に拝礼し参拝する。

「唱」九重の空にある神殿の門を開ければ、香りよき風が顔をなでる。符官様は、相貌麗しく紫府を去り、威風堂々と天壇より出でます。

上界の符官たる天仙様の降臨を請う。符官様は龍馬に乗り人間に下る。手に令字旗を持ち、金色の甲冑を纏い、なんという厳かさ。

6 この廟は、蒙古襲來の時、この地を救った人物を祀っている。その縁起は以下のように記される。「護国鎮海侯廟碑記 施諤，字伯仁，南宋朝末年諸生。一日出遊，在途中拾得一枚小蛋，携之回家，括在綿絮中，不久孵出一條小蛇 真喜愛，制一竹筒存放，精心養活，漸長。有日施外出訪友，小蛇趁隙從竹筒中私出納涼。是時，北方蒙古兵南侵中原，沿途大肆殺掠，衆百姓紛紛向江南逃南避災。蒙古兵正乘勝追殺時，不意忽有一金盔金甲之少年將軍，提槍攔襲，蒙古韃子兵急起回擊，豈是他對手，幾個回合，早已敗下陣來，棄甲丟戈，四散逃竄，『這位金甲將軍從何而來？』衆人正在感到驚詫時，適施諤訪友歸來，知之，便說：『此吾小蛇也。』呼之，奄然縮小，附身游回筒中。蒙古將領得知乃是施諤所為，救派幾名韃子兵去將施諤捕歸，逼迫他交出竹筒。施諤寧死不屈，抗辭罵敵，蒙古將下令處斬，忠貞的施諤竟慘死于韃子屠刀之下，金甲神知道後大怒，就挺槍直奔蒙古韃子兵營，為施諤復仇，力戰群寇，所向披靡，斃傷韃子兵無數。奈因韃子兵愈聚愈多，終因寡不敵衆，槍折力竭而死于亂軍中。不久，蒙古軍移師離去。當地郡守將此事上奏朝廷，宋理宗於景定五年(公元一二六四年)三月初五敕封施諤為靈顯候，大明開國后，又加封為護國鎮海侯。並立廟奉祀，永佑八方，降福無垠。爰為之記。公元二〇〇二年十一月吉旦。」

7 注4に引く張玉觀「平湖太保書」に見える。

还请中界符官号云仙, 银盔银甲电光现, 手执  
请神旗一面, 驾马三鞭到坛前。

〔白〕恭请三界功曹符官使者, 身登宝位, 社主  
虔诚带领众姓香民, 恭敬上中下三界符官, 接风  
酒当初敬, 社主敬酒—

〔唱〕初杯酒, 敬天仙, 上界符官本姓盖。身穿  
绣袍出天池, 九霄云内得成仙。

民为上, 号青天, 平江知府最清廉。秉公执法  
为父母, 封伊上界达三天。

地势高, 地为腰, 大地松花满天飘。地角清泉  
花四溅, 地岳地府下地朝。

〔白〕社主虔诚众姓香民, 恭敬符官使者, 接风  
酒, 当二敬—

〔唱〕二杯酒, 敬云仙, 中界符官刘沉香。他是  
劈山救母威名大, 三郎神得救上天庭。

传仙法, 救娘亲, 骨肉团圆转家乡。孝心一片  
动天地, 封你中界为朝神。

水汪汪, 水更猛, 水流水花水榭香。水府龙宫  
来朝拜, 云仙升腾神坛上。

中界の符官たる雲仙様の降臨を請う。符官  
様は銀色の甲冑を纏い輝きて、請神旗を手に、  
みたび鞭を当て馬を駆りて壇の前に着く。

「白」三界の功曹符官様方は壇にお登りにな  
りますように。施主は謹みて参拝者を率い、  
上中下三界の符官様に神酒を差し上げます。  
まずは歓迎の神酒を。施主は神に神酒を差し  
上げます。

「唱」最初の一献は天仙様に捧げましょう。  
上界の符官様は本姓は蓋であられる。刺繍の  
長衣を身に纏い、天池より出でて、九重の空  
にて仙人となられた。

民を上にし、号は青天、平江の知府にて最  
も清廉。公と法を重んじられた。上界の神に  
封じ、三天に通暁していただきましょう。

地勢は高く、地は天地の腰にして、大地の  
松花は天に漂う。地端より泉花湧き出て、飛  
沫が舞い上がる。地岳様、地府様は地上に下  
られた。

「白」施主は謹みて参拝者を率い、符官様に  
歓迎の神酒、再度差し上げます。

「唱」二献目の神酒、雲仙様に捧げましょう。  
中界の符官・劉沉香様。劉沉香様は山を切り  
開かれ、母様を救われ、その威名は広くとど  
ろき、三郎神のお助けを得て、天庭に上られ  
た。

方術を広め、母様を救われ、骨肉の団円は  
故郷に伝わり、孝行の心は天地をも動かされ  
た。彼を中界の神に封じましょう。

水は湧き出、その勢いは更に激しい。水は  
流れ、飛沫が上がり、水に臨む東屋から香り  
が漂う。水府の竜王様は出でまし、雲仙様は  
神壇に登られた。

〔白〕社主虔诚众姓香民, 奉敬符官使者, 接风酒, 当敬三杯一

〔唱〕三杯酒, 敬水仙, 下界符官周叔成。扬州知府亲继父, 蓬莱山得遇吕洞宾。

三杯三盏敬符官, 相烦符官请转神。

〔白〕今据是浙江省嘉兴府平湖县监管××乡, ××村社首弟子×××, 带领众姓乡邻×××……(以下通报社单), 善男信女, 虔诚恭请, 太平社会敬灵神, 奉敬符官请朝神。

〔唱〕赞符官上马三杯酒, 上马驾鞭去请神。

凌霄殿玉皇大帝焚香请, 三天三宝焚香请, 三天门里一同行。

普陀山, 奉请观世音; 云台山, 三官大帝焚香请, 武当山, 玄天上帝同降临。

宝光山, 文昌帝君焚香请; 玉泉山, 关圣帝君同降临。

蓬莱山, 奉请福禄寿三位老星君; 昆仑山, 和合二仙一同行。

请了佛, 又请神, 再来请五岳众灵神。

〔白〕中界符官身骑快马到福州府富阳元桥奉

「白」施主は謹みて参拝者を率い, 符官様に神酒を差し上げます。歓迎の神酒, 三献目を差し上げます。

「唱」三献目の神酒, 水仙様に捧げましょう。下界の符官・周叔成様。揚州の知府はその継父であられ, 周叔成様は蓬莱山で呂洞賓様にお会いした。

符官様に三献目を捧げましょう。符官様, をお煩わせますが, 神々にお伝えくださいますようお願い申し上げます。

「白」今, 浙江省嘉興府平湖県の管轄下××郷, ××村の社主弟子××, 郷里の人々を率いて(以下は社単に見える人々の氏名), 善男善女みな謹んで神々の降臨をお願い申し上げます。太平社は神々を敬い申し上げます。符官様には神々をお呼びくださるようお願いいたします。

「唱」符官様は馬に乗り, 三献の神酒を口になされた。そして, 馬に乗り馬を駆り, 神々を呼びに行かれた。

凌霄殿の玉皇大帝様を香を焚いて請う。三日三晩三宝を用い, 香を焚いて請う。符官様は大帝様と共に三天門にお出ました。

普陀山に観音菩薩をお招きし, 雲台山に三官大帝様を香を焚いて請い, 武当山に玄天上帝様もともに降臨された。

宝光山に文昌帝様を香を焚いて請い, 玉泉山に関聖帝様もともに降臨された。

蓬莱山に福禄寿の三帝をお招きし, 崑崙山に和合二仙人も共にお出ました。

仏様をお招きし, (名だたる) 神様もお招きした。次は五岳の神々をお招きしましょう。

「白」中界の符官様は早馬で福州府富陽元橋



請郡王：

〔唱〕后殿夫人一同行。

到山东登州府蓬莱县奉請劉孟將大人，后殿夫人一同行。

前往西岳華山府奉請金七總管，后殿夫人一同行。

再到安徽安慶府龍里縣奉請霍光丞相，后殿夫人一同行。

到金沢鎮灶天侯王焚香請，楊龍・楊虎様は共に

到浙江杭州城隍山請省主城隍，后殿夫人一同行。

三天竺請普門大士，南高峰請劉猛將大人，北高峰請財洛大帝，玉泉山請關聖帝君，南山淨寺請三珍珠佛，昭慶寺請如來世界。

符官使者回來請嘉興府府主城隍，后殿夫人一同行。

煙雨樓請趙一都堂，杉青閘請四大人，十八里橋請財洛大帝，焦山門朱福二爺同降臨，新豐鎮請四王千歲，湖墩廊請王四相公，白馬堰請后府城隍，平湖縣縣主城隍同降臨。

后殿夫人出宮門，還有那三班衙役，六房書吏，船上官兵。

符官使者到觀音堂請普門大士。（下略）

〔白〕奉請眾位大人，身登高位，社主虔誠，眾姓香民，奉敬眾位明神，三十位朝神，接風酒當普敬。

〔唱〕杜康王製造多美酒，傳入凡間敬朝神。

に郡王の皆様を招きに行かれた。

「唱」（神々は）夫人同伴でお出しました。

山東の登州府蓬莱県に行き劉孟将様を請う。夫人同伴でお出しました。

西岳の華山府に詣で金七総管様を請う。夫人同伴でお出しました。

更に安徽の安慶府竜里県に行き霍光丞相様を請う。夫人同伴でお出しました。

金沢鎮に行き竈天侯王様を請う。楊龍・楊虎様は共に

浙江の杭州城隍山に到り省の城隍様を請う。夫人同伴でお出しました。

三天竺に普門大士様を請う。南高峰に劉猛将様を請う。北高峰に財洛大帝様を請う。玉泉山に関聖帝君様を請う。南山淨寺に三珍珠佛様を請う。昭慶寺に如來様を請う。

符官様はお戻りになり，嘉興府の城隍様を請う。夫人同伴でお出しました。

煙雨樓に趙一都督様を請う。杉青閘に四大人様を請う。十八里橋に財洛大帝様を請う。焦山門には朱福二仙人が共にお出しました。新豐鎮に四王千歳様を請い，湖墩廊に王四相公様を請う。白馬堰に後府の城隍様を請い，平湖県の県主の城隍様と共に

后殿夫人様は宮門より出られ，三班の小使，六房の文官，船上の兵士を従える。

符官様は觀音堂にて普門大師を請う。（以下は省略）

「白」多くの神々をお招きし，高位にお上りいただきました。施主は謹みて参拝者を率い，明神様や三十の朝神様に神酒を捧げます。歓迎の神酒をあまねく捧げましょう。

「唱」杜康様は沢山の美味し酒を造られた。

〔白〕本廟福德五聖、五位大人、門神和李侯王、欄頭五聖、蚕花五聖、田公地母，奉請青龍、白虎、朱雀、玄武、勾陳、騰蛇、檐頭五聖、瓜仙五聖請降臨，東厨司命、除鬼土地請降臨。符官請得清，記得明，凡人若然請神勿周到，煩請上界符官請靈神。

世に伝わりて神々に奉る。

「白」本廟の福德五聖，五人の大人，門神，李侯王，欄頭五聖，蚕花五聖，田公地母は，青龍，白虎，朱雀，玄武，勾陳，騰蛇，檐頭五聖，瓜仙五聖のご降臨を謹んで請う。東厨司命様，除鬼土地様のご降臨を謹んで請う。符官様は招くべき神々をよく心得て，鮮明なご記憶。そうであれば，凡人は神々を招くのに周到にならずともよい。上界の符官様にお願いすれば事足ります。

以上が「請神」の「白」と「唱」であり，「符官」を呼び，「符官」なるものに他の神々の降臨を依頼するかたちで，神々は招かれることが分かる。

そもそも，「符官」とは，道教などで使者として神々を招く職にあるもののようで，たとえば，『綴白裘』（十一／雜劇「斬妖」）<sup>8</sup>には，「（末扮符官打馬上轉，下馬見生介）眞人有何法旨（生）牒文一道，速到灌江口邀請二郎眞君到此降妖，不得有悞。（末）領法旨（上馬轉下）（生）一擊天門開，二擊地戶裂，三擊神將至；奉請灌口二郎眞君速降。（雜扮四小鬼，外，淨，末，丑四帥，小生扮二郎神上）（合）【京腔】五色雲高，氤氳飄渺旌旗繞，刀戟森森，要把妖氛掃」とあり，「符官」は妖怪を退治するために二郎神君を招く役目を担っている。また，『醒世恒言』「呂洞賓飛劍斬黃龍」では，「只見一疋馬飛來。到面前下馬離鞍，背上宣筒裏取出請書來：告上仙，東京開封府馬行街居住，奉道信官王惟善，於今月十四日，請道一壇，就家庭開建奉真清醮三百六十分位齋。請往來道士二千員，恭爲純陽真人度誕之辰。特賚請狀拜請。洞賓聽說：吾忘其所以，來朝是吾生日，符官有勞心力遠來。符官曰：小聖真到終南山，見老師傳說，上仙在中原之地，特尋到此，得見上仙。」<sup>9</sup>とあり，道教の信者・王惟善という人物が，道教の神々306柱を祭り，道士2千人を迎えて呂洞賓のために誕生日を祝う際，符官は招待状を持って現れると記される。

また，民国時代の福州に「符官使者」という歌詞があり，「符官使者神之最靈，升天達地出入幽冥。爲吾關奏不得留停，有功之日名書上清。皈命飛雲捧奏大威靈，皈命飛雲捧奏大威靈，皈命飛雲捧奏大威靈」<sup>10</sup>と記され，符官は神の中で最も靈驗あらたかで，天，地，冥界どこに

8 『綴白裘』（中華書局 1940）

9 古本小説叢刊第30輯『醒世恒言』（中華書局 1991）

10 「国家文化資料庫92年成果彙編」（民國九十二年十月二十八日 於錄音室現場錄製 原件典藏機關：國立傳統藝術中心 民族音樂研究所）に収める。



でも出入りし、人々の奏上を迅速に届けたり、功名を天書に記す存在である。

このような、明・清の小説や戯曲にも登場する符官像が今日の民間祭祀にまで引き継がれているのは興味深い。平湖の秋社においても符官の東奔西走によって神々は招かれるが、符官は、上界・中界・下界と各界に存在し、それぞれ、蓋青天、劉沈香、周叔成と叫ぶと紹介されている。このうち、蓋青天はその土地に伝わる清廉な官吏を指すのだろう。清の小説『蕩寇志』（『結水浒传』ともいう）には、「到得鄆城不久，便就興利除害，風清弊絕，吏民無不歡喜，又呼他做“蓋青天”。」<sup>11</sup>とあり、蓋青天は、有益な事を奨励し、有害な事を取り除くもので、官吏平民の別なく喜ばれていたと記される。一方、劉沈香は、人界の男性と愛し合い自分を生んだ罪で山奥に閉じ込められた神界の母を助けた孝行者であり、越劇の劇団や浙江京劇団が得意とする「宝蓮灯」などで馴染みの人物である。下界の神・周叔成は、蓬萊山で呂洞賓と遭ったというから神仙世界にも通じたという伝説をもった人物で、同時に揚州知府を継父とすると記されているところを見れば現存した人物でもあったのだろう。いずれにしても、人界を超越した存在で、それでいて人界に生を受けたと伝えられる身近な神々がまず招かれ、その他の神々の招請は彼らに託されるのである。ついで、全国各地の神山に住む神、五岳に住む神々が次々に「神案」に招来される。「請神」において「神を招くのは多ければ多いほどよいが、神名を暗記するのはなかなか難しい」とは、徐文珠の弟子の言葉だが、いかなる神を招来するかこれといった規則はないようだ。また、符官が請神の役を任うとされる。それゆえ、上掲「請神歌」の中でも「神々を招くのに周到にならずともよい」というのであり、一方、民間で平穩を祈るのに、そもそも、意識的な神の選択など必要ないのかもしれない。

ところで、今回の調査を事前に手配し、同行してくださったのは張漢勇平湖市戯曲協会元理事であるが、氏によれば、この神案も時代とともに簡略化の途にあるという。いま、張漢勇氏のスケッチを以下に載せる。

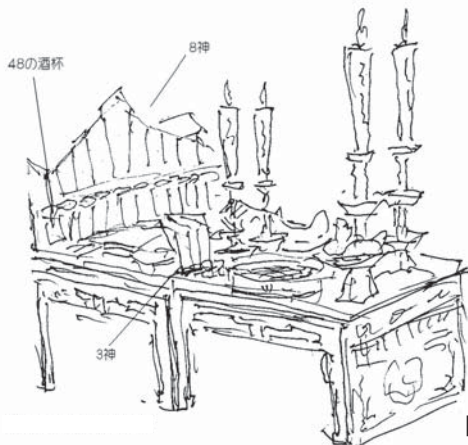


図1 2008年 太平社神案図

11 中国小説史料叢書『蕩寇志』（人民文学出版社 1981）

社単を読む徐氏の声を耳にしながら、社の参加者は香を手に神案に跪く。ついで、神が到来したことを示す「接神」が始まる（写真2）。蠟燭をともし、神酒を注ぎ、「接神歌」をうたう。酒を注ぐのは神の霊に敬虔な気持ちを捧げ、安寧・富貴・健康・長寿を願うためである。再び『平湖文史叢談』に基づき、その一部を以下に掲げる。



写真2 神案に向かい「接神」を唱う徐文珠

《接神歌》

〔白〕 伏以救命祀祭，庶民大悦，己所勿欲，勿施于人。乾坤祭圣，接神保佑，永享太平，诸讳如意，迎神接圣，鞠躬升堂参拜……。

〔唱〕 紫香炉内绿条条，红烛双双放白毫。上盖九州珠子透，根盘四海叶飘飘。

本有长生不老千年果，枝有四十八万节万年桃。

神主点香求吉利，祈求荣华富贵乐陶陶。

金龙传定玉楼台，南宫北府殿门开。

着金袍，束金带，朝神位位下云霄。

众姓香民虔诚请，秋苗社会敬灵神。

远望南山一枝花，着地生根直到梢。

《神を迎える歌》

〔白〕 命(めい)により祀りを執り行います。人々は大いに喜び、己の欲せざる所は人に施すことはありません。乾坤は聖を祭り、神を迎えて加護あり、とこしえに太平に、種々の忌諱も意の如くありますように、神聖を迎えて、お辞儀して堂に登り参拝をいたします…。

〔唱〕 紫の香炉に緑の線香、赤い蠟燭に白い芯。上は九州を蓋い真珠は清ら、根は四海に張りて葉はひらひらと。

もと長生不老の千年果あり、枝に48万の万年桃あり。

神主は香を立て縁起を求め、富貴栄華を祈る。

金龍は玉楼台に伝わって定まり、南宮北府の殿門は開く。

金袍を着け、金帯を絞め、神々は雲霄より下る。

普く参拝者は謹んで請い、秋社にて神々を敬う。

遠く南山の一本の花を望みみれば、地に着き根を生やし梢まで真っ直ぐと。

千年结对寿仙桃，赐给人间长生老。

〔白〕 奉请三十六位大人，身登宝位，社主弟子会同众姓香民奉敬仙界士真、五岳大人，接风酒当初敬。（社主斟酒）——

〔唱〕 初杯酒，碧波清，百花小姐闹东京。终身许配曲文善，二郎神相请朗必林。

〔白〕 社主虔诚，会同众姓香民，接风酒当成双二敬。（社主斟酒）——

〔唱〕 二杯酒，敬神灵，飞来峰景致在杭州。孤山独坐西湖内，天竺山进香闹稠稠。

〔白〕 社主虔诚，会同众姓香民，接风酒当圆满三敬——

〔唱〕 三杯酒，敬神灵，何文秀落难唱道情。九里桑园访贤妻，夫人名叫王兰英。

〔白〕 三杯酒恭敬神，传香人带领社主虔诚今居浙江省××府××县××庙界××村庄门。奉请敬圣，社主弟子会同众姓香民×××，×××……于××××年××月××日开天黄道三日奉敬神灵——

〔唱〕 五岳大神请得来，三牲供礼来奉敬。刀筷齐全尽周到，陈年美酒多恭敬。

千年の実を結ぶ寿仙の桃，この世に不老長寿を賜れり。

〔白〕 36人の大人を請う。宝位に上りますよう。施主は謹みて参拝者を率い，仙界の士真，五岳の大人を敬いて，歓迎の神酒を差し上げます。（施主が神酒を注ぐ）

〔唱〕 最初の神酒は，碧波清らか，百花小姐が東京を鬧がす。生涯を曲文善に委ね，二郎神も朗必林を請う。

〔白〕 施主は謹みて参拝者を率い，歓迎の二献目の神酒を差し上げます。（施主が神酒を注ぐ）

〔唱〕 二献目の神酒もて，神靈に捧げましょう。飛来峰は杭州に在る。孤山は西湖の内に独座す，天竺山は参詣人で人の山。

〔白〕 施主は謹みて参拝者を率い，歓迎の三献目最後の神酒を差し上げます。

〔唱〕 三献目の神酒もて，神靈に捧げましょう。何文秀は難に遭い道情をうたう。九里の桑園に賢き妻を訪ね，夫人の名は王蘭英という。

〔白〕 三献目の神酒，恭しく神に捧げ，祭祠を行う者は施主を伴い謹んで浙江省××府××県××廟界××村にあります。神々をお招きいたし，施主は参拝者と共に××において××年××月××日，吉日の三日の間，神を祀りましょう。

〔唱〕 五岳の神々を招き得ば，三犠の供物を捧げましょう。食器の準備もできたらば，美味し古酒を捧げましょう。

神酒を捧げる対象は当然神であるが、神酒を捧げるための「白」や「唱」の中に、身近な演芸の題材が差し挟まれていることに注目しよう。

たとえば、二献目の酒の後には「済公」が歌われている。済公はふだんは「瘋癲」の物真似をしているが、いざという時に村人を助ける僧侶であり、南宋の時、杭州は靈隱寺のちに浄慈寺にいたと伝えられる。清代に郭小亭著「済公全伝」があり、滬劇にも滑稽戯として編まれている。

三献目の酒の後には、「何文秀」のものがたりが取上げられる。「何文秀」とその妻「王蘭英」のものがたりは、平湖の近くの海寧を舞台とした、越劇の代表的な出し物である。その土地の悪しきボス張堂という者が、王蘭英を見初めて奪おうとし、科挙試験に赴こうとした何文秀と王蘭英を計略に陥れ、幾多の辛酸を舐めさせるものの、最後に二人は結ばれるという情節。何文秀ものがたりのうち、上掲「何文秀落難唱道情」は、何文秀が道情うたいに落ちる場面をいい、「九里桑園訪賢妻」は、何文秀が張堂から逃れて桑園にいる妻のところに捜し尋ねる場面をいう。越劇以外にも、江南では、宝卷としても広く伝わっていて、『宝卷』初集<sup>12</sup>の三十五冊に「何文秀宝卷上下集」、同三十六冊にも「四喜宝卷」が収められているが、これらは越劇のそれと同じ情節である。しかし、これらがなぜ「接神歌」で語られるのか。前途有望な若者である何文秀が、妻と離別した後も妻への思いを強く抱き、妻もまた、何文秀が死んだと伝えられてもその心は変わることがなかった、その心根を賞賛するためだろうか。いや、ここでは、何文秀ものがたりの説く「善有善報従古説、悪人悪報不差分」（「四喜宝卷」）という内容のために他なるまい。娯楽を通して善行を行うよう人々を教化するためであり、善行を行うものには善の報いがあるようにと神に願うために持ち出されたものであろう。

「請神」「接神」という儀式に、なじみのものがたりを差し挟むことで、人々に親近感を抱かせ、教化を納得あるものにすることを意図していると思われる。民間の祭祀自体が、現在も、芸能といかに密接に関係しているかを窺うことができよう。

11時過ぎ、休憩と食事を参加者全員でとる。

13時 開篇（徐全妹の長寿仙）と鉞子書「白玉燕」が始まる。この日の開篇は見習中の徐文珠の弟子であり、「表妹」の徐全妹が命ぜられた。隣室では徐文珠が弟子の演技に顔をしかめ、あまりの不出来に耐えられず、途中から徐文珠自身が担当することとなった。

ところで、「開篇」とは、「まくら」を意味するが、蘇州を中心とした地域で盛んに行われてきた弾詞で用いられる語でもある。また、滬劇（上海劇）や越劇でも用いられる。この「開篇」という語の使用は、平湖が浙江省とはいえ、文化的には江蘇の色彩が濃厚であることを示しているだろう。

12 張希舜・濮文起等主編『宝卷初集』（山西人民出版社 1994）所収。

ついで、「白玉燕」が徐文珠によって唱われた（写真3）。徐文珠のメモに拠るおよそのストーリーは次のようである（徐文珠のメモに誤字訂正等を加えて掲載する）

「白玉燕」

大明朝弘治年間、奸賊为了要宝贝白玉燕害死了李天明一家大小。逃出来的儿子李文祥与家人二人住坟房受尽苦难。

18岁的李文祥要进京考官去山东岳父家

借钱。岳父想害死李文祥，多亏小姐救他逃出去，给他钱。李文祥带钱进京去被强盗抢了钱，只留下白玉燕，无计之下去扬州典当白玉燕。谁知碰到贼人赵德龙，要烧死文祥。幸被赵玉珍搭救，救到楼上托终身与他，并给钱命他连夜逃。谁知被赵德龙发现追上，又被抓进赵府，还要用火烧。赵德龙的小姐又要揪送官府查办。李文祥被官差打的死去活来，没有办法只好招口供。他们说李文祥抢赵德龙18只箱子金银，杀掉17个船上人。结果文书上京，批文传来，九月重阳要处死李文祥。正巧来一位钦差大臣徐保春，发三次上文书搭救他。你知道吗？徐保春原来是李文祥指腹为婚的对象冯玉娟。后来被奸贼知道，把徐保春女扮男装，阴阳颠倒上报，犯了天条，害苦了好多忠良。恰巧御妹娘娘搭救，加小钱山的英雄搭救，除去奸贼，夫妻结婚。（明の弘治の治世，陰謀を企てている輩が白玉燕を奪おうと李天明一家を殺害しようとした。運よく逃げおおせた息子の李文祥は使用人と共に，墳房に住み苦難の生活を送った。18歳になると李文祥は科举試験に応じるため山東の岳父から資金を借りようとしたが，岳父は反って李文祥の殺害を謀る。しかし，婚約者が李文祥を助け金銭を与えたことによって逃げ出すことができた。が，京に行く途中で強盗に金を奪われ，手元には白玉燕が残るだけとなった。そこで，揚州の質屋に行き白玉燕を質草にする。そのとき，趙徳龍なる盜賊に遭い李文祥は殺害の危うきに遭遇するが，今度は（その娘）の趙玉珍に助けられ，二人は結婚を誓い，趙玉珍から資金をもらいその日のうちに逃げおおせる。しかし，趙徳龍はそのことに気づき追跡し趙府に連れ戻し焼き殺そうとする。趙玉珍は罪状を調べるように役所に連れて行く。李文祥は拷問を受けたため心にもない自供をし，趙徳龍の18箱の金銀財宝を奪い17人の船人を殺した罪を着せられる。その結果，罪状は京に齎され批准となり，重陽の節句に死罪に処せられることになった。しかし，折よく欽差大臣・徐保春の助力を得て，三度上奏して李文祥を救うことができたが，この徐保春はなんと李文祥の婚約者・馮月娟であった。その後，徐保春は男装した馮月娟であることが露見し，陰陽を顛倒させ，天を欺き，良民を害したとして訴えられた。しかし，皇帝の妹と小錢山の英雄に助けられ，陰謀者を退治し李文祥は馮月娟



写真3 鉸子書を演じる徐文珠



と結ばれ大団円となった。)

これは弾詞では「双玉燕全伝」と呼ばれ<sup>13</sup>、江浙一帯に広く語られたもので、李文秀の零落→婚約の破談→強盗に全財産(白燕)を略奪される→婚約者は李文秀を見捨てず男装女扮して救助する→婚約者と結ばれる、という情節で、公案の色彩を帯びているとともに、女性の献身と貞節を謳う作品となっている。阿英『弾詞小説評考』<sup>14</sup>にも『双玉燕全伝』として取り上げられているが、弾詞でも、主人公の名は李文祥、婚約者は馮月娟と記されている。宝巻にも、「双玉燕宝巻」があり、『増補 寶巻の研究』<sup>15</sup>では、主人公は李玉俊、婚約者は張月英とされる。また、『宝巻初集』第37冊にも『玉燕宝巻』(民国20年)が収められ、ここでは、主人公の名は李文祥、婚約者は馮月娟となっている。いずれの作品も、細かなプロットに相違があるものの、情節はおおよそ同じである。

徐文珠は、「白玉燕」以外に、「文武香毬」<sup>16</sup>「九更天」「紅鬃烈馬」なども得意とする。このうち、「文武香毬」は、宝巻と弾詞に見られる出し物であり、男装女扮による男女の恋のものがたりで「有情人終成眷属」をテーマとする。また、「九更天」は、清初の朱素臣の手になる「未央天」と同じ題材で、兄の殺害犯を突き止める公案作品であり、一名「馬義救主」ともいうように下男の忠義を謳うものがたりである。一方、「紅鬃烈馬」は、薛平貴に対して、貧を嫌った妻の父親・王允がづらい仕打ちをするものの、妻の王宝釧は夫を待ち続け、最後には苦難を克服して夫婦団円するという、苦難と出世のものがたりで、貞節が讃えられる。これらは、いずれも民国によく演じられた京劇の有名な劇目でもある<sup>17</sup>。鉞子書などのような、きわめて地域性に富む小さな曲種(曲芸の種類)は、大きな曲種の影響下に、それらを吸収し、その生命を繋いできたことが肯ける。また、かつて平湖一帯で人気のあった古い題材が再び演じられていることを看取できる。

13 譚正璧・譚尋編『弾詞叙録』(上海古籍出版社 1981)には、「双玉燕」としてその情節が紹介されている。また、類似した話として、逸名伝記「双玉燕」、宝巻「白玉燕」、和劇「碧玉球」が挙げられている。また、胡士瑩『弾詞宝巻書目』(上海古籍出版社 1983)には、武林懷徳堂刊本弾詞(清嘉慶5年)、惜陰書局石印本(筆者注、清末民国頃)があると記されていることから、清末の江南において、「双玉燕」のものがたりは広く流布していたと思われる。

14 阿英『弾詞小説評考』(中華書局 1937.2)

15 澤田瑞穂著『増補 寶巻の研究』(図書刊行会 1975)

16 「車錫倫鑒定常州包立本先生收藏寶巻目」(『民間文化青年論壇』所収)にも、この題名が見える。また、輪田直子「上海図書館所蔵弾詞目録」(東北大学中国語学文学論集第4号 1999年11月30日所収)に、【繡像文武香毬】(清)申江逸史重輯、十二卷、十二冊、清同治二(1863)年二酉室刻本、【繪圖文武香毬】(清)佚名撰、八卷七十一回、八冊、清宣統二(1910)年龍文書局石印本、【繪圖文武香毬】(清)佚名撰、六卷七十一回、六冊、民国間石印本が挙げられている。

17 『戲考大全』(上海書店 1990)の「九更天」の項に、上海で九更天を演じれば潘月樵が一番であると記される。



以上のように、今日の鉸子書の再興は、春社、秋社の復活とともにもたらされたものであり、劇目は、宝巻・弾詞などでなじみのものか、京劇などでかつて人気を博したものが再び唱われていることを窺い得る。

### Ⅲ：調査二 寄媽太太廟の開山

日時：2008年11月3日 7時開始

場所：平湖市鐘埭鎮郷鎮街四十二濱

祭祀の対象：寄媽太太（徐氏仙尊）・寄媽夫人

主催者：四十二濱の村民有志

寄媽太太（徐氏仙尊）は、陳興祖との間に3人の子ども（陳紹龍、陳太夫、陳氏仙尊）を生んだ人物とされ、寄媽太太の実家である平湖・湯家濱に祀られていたが、その木彫の本尊が河の流れに乗って四十二濱に着いたので、これを祀ることにしたという。しかし、寄媽太太の功績については主催者も知らないという。この地に寄媽太太が漂着した縁を重視しているようであった。

寄媽太太廟の建築は、これまで地元政府の許可を得ることができず、祀っては壊し、壊しては祀ることの繰り返しであったが、今回、正式に許可を得て開山に至ったという。祭祀の中でも、開山式は当該廟宇にとって一回限りのものである。その開山の儀式に芸能がどう関わるか、祭祀芸能を研究する上で、いささかなりとも役立つと思われる。

ここでも、徐文珠は、神案を設えることから始める。神案には、四聖（関帝聖君、観音菩薩、玉皇大帝、玄天上帝）、五岳（劉千歳、戚大神、金千歳、楊千歳、五三相公・五四相公）、三十六神（如来仏祖、寿星祖師、太上老君、八洞神仙、四海龍王、朱福二相、五大神、錢勤王、海大神、施王千歳、大王千歳、東岳大帝、張天師、陳氏仙尊、城隍大神、水仙水官、東厨司命、当方土地）と記される（写真4）。三十六神にまでに数が増えると、実際に36体の神名が記されなくてもよいようである。



写真4 神名の記された赤紙



写真5 太保先生

一方、廟内には、「太保先生」なる男性（邱在跟という60歳くらいの人物）がもう一つ別の神案を設え、小さな鼓と木魚を敲きながら寧波の天童寺で買ったらしい経「南唐太君夫人」を読み（写真5）、神籤を書いている。その神籤を求め、近隣の村から集まったと思われる女性が行列を成す。他方、寄媽太太が憑依したとして、「自分は寄媽太太なり、うれしや、うれしや」と歌いだす「巫婆」なる人物がいる。まことににぎやかな廟会である。

徐文珠は神案を設えると、参詣の人々の依頼にお札を書きながら、結婚を拒み修行して白衣観音になったというものがたりの「妙英宝卷」<sup>18</sup>を宣じ始めた。前出「南唐太君夫人」といい、「妙英宝卷」といい、寄媽太太（徐氏仙尊）という女性神の開山会のゆえか、女性に関するものが選ばれている。

「妙英宝卷」に耳を傾けていると、外でも、にぎやかな声がする。村の女たちの開山を祝う踊りが始まったのである（写真6）。次々と繰り広げられる踊りの内容と聞き取った歌の一節は以下のようなものである。



写真6 民歌を歌い踊る村人たち

- ① 花籃舞（寄媽太太援護の歌）：阿弥陀佛 十二个月当中每月就什么季节要那个寄妈太太帮忙
- ② 打電箱（縁起のよい竹踊りの歌）：老人福气好…
- ③ 十個抽斗（物の豊富さを喜ぶ歌）：吃得香，油香香。南瓜香…
- ④ 賭博害（賭博を戒める歌）：賭博害死多，工厂厂长随便花…
- ⑤ 挑花籃（花売りを迎える歌）：挑花籃，挑花籃…
- ⑥ 妻子好（姑を戒め，妻を讃える歌）：公公，婆婆骂老婆…
- ⑦ 採茶葉（茶摘歌）：边采边念阿弥陀佛…
- ⑧ 老婆婆参拜（参詣の歌）：老婆婆去拜阿弥陀佛…
- ⑨ 十個婆婆去烧香拜仏（烧香拜仏賛歌）：十个婆婆去烧香拜佛…
- ⑩ 兩個老婆婆勸去烧香（二人の老婆が参詣を勧める歌）：请不到，这个月没有空，下个月哪有时间去拜佛…
- ⑪ 五界新事（文明の利器を称える歌）：世界衣服绝对好，家用电器很多来，大小车子都好看…
- ⑫ 婆婆烧香（烧香賛歌）：婆婆去烧香…

18 前掲の澤田瑞穂『増補 宝卷の研究』巻四に「妙英宝卷」の梗概がある。

歌は女たちに焼香を勧める内容のものが多く、12曲中4曲がそれである。歌に「南無阿弥陀仏」の6字を挿入して（例えば、上掲の花籃舞、採茶葉など）宗教色を添えているものもある。その他は、日常の生活を反映する内容である。

このような民間の歌曲は、『中国民間歌曲集成』<sup>19</sup>にも数多く収録されている。その「浙江巻」では、上掲の「焼香」に関する歌⑧⑨⑩⑫の類は、民間歌曲の中の「儀式歌（民間の儀礼的行事の際に唱われる歌）」に類別され、それらについて「民間信仰活動、焼香、仏曲の類で、多くは三宝を礼賛し、祈りを捧げ、人々に警告を与えるような因果応報の話」と説明されている。今回、平湖で耳にした歌の半分はこの類であろう。例えば、『中国民間歌曲集成』に収められた縉雲県の606「焼香経」<sup>20</sup>には「焼香有卷焼香经，焼香娘子来念经。观音佛前把经念，保得奴奴福寿高(来，南无阿弥陀佛)」と録され、観音に焼香をして経を唱えれば福寿を得ることができると歌われる。

また、上掲書には、焼香歌以外にも、今回耳にした民歌と類似する内容のものが見られ、その213「勸賭歌」も、テーマは賭博推奨のようにも見えるが、実は忠告に耳を貸さず破滅に陥る賭博好きの夫を12月の数え歌形式で諷める歌であり、上掲④「賭博害」に類似する。建徳県の607「採茶経」<sup>21</sup>も、「一面(呀么)茶叶(么)两(呀)面(呀)青(呀，啊南无阿弥陀啊佛，南无南无阿弥陀哇佛。)(※)正月二月去望你。三月四月来采你。镬子烧得红透幽。倒得镬子要来烰你。客人走来要请你。客人走了来损你。」「一面(のなあ)茶(よ)，一面(になあ)青い(よ)(ああ，南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。)(※以下同じ調子で繰り返す)一月二月は成長を見，三月四月は葉を摘む。鍋で炒れば赤く透きとおる，鍋から出してかき混ぜる。客が来ればそれを出し，客が去ればそれを捨つ。」と録され，⑦の「採茶葉」に類する。この歌は，茶葉を育て，摘み，炒り，客に勧め，そして捨てる行為を歌うだけの簡単なものであるが，六字の名号が差し挟まれている。因みに、『中国民間歌曲集成』では，上掲「勸賭歌」は「山歌（農村の人々の生活を主とし，生活そのもの，生活観，及びその喜怒哀楽を映し出している）」に収められ，「採茶経」は「儀式歌」に収められる。この分類からすれば，生活の変化を喜ぶ歌である③「十個抽斗」，⑩「五界新事」も，嫁姑の妻への賛歌である⑥「妻子好」も「山歌」の類とみなすことができよう。

今回目にすることができたこの踊りのグループは，農家の踊り好きが集まってできたものであり，このうちの一人が地域の人々を集めて練習をリードしたという。古くから伝わる民歌が，大きな社会変革を経てもなおその伝統を保ち続けている。女性たちが纏っている衣服のデザインも

19 《中国民間歌曲集成》全国編集委員改編『中国民間歌曲集成（浙江巻）』（人民音楽出版社 1993）

20 前掲『中国民間歌曲集成』に見える。縉雲県は麗水市の東北部に位置する。

21 前掲『中国民間歌曲集成』に見える。建徳県は杭州市の東北部に位置する。

古いままである。かつて、多くの農村の女たちは、日常の生活に追われ、遠出は神仏の焼香くらいであったろう。この地における今日の生活も、或いは以前と比べてそう大きな相違はないのかもしれない。神に安寧を願い、外出を楽しむ焼香の歌には、そのような女たちの思いが反映されている、と見ることもできよう。

10時18分。早朝から始まった儀式は、開山にふさわしいとして選ばれたこの時間（10時18分）に、本尊たる2基の仏像がベールを取り外されて開帳となった（写真7、8）。廟内には、開帳を喜ぶ宣卷の声、経を読む声、参拝の女たちのざわめきが満ち、昼を迎えることとなった。



写真7 ベールに覆われた寄媽太太



写真8 ベールを外した寄媽太太

#### IV：まとめ

以上が、鉸子書芸人・徐文珠に同行させていただき、平湖の農村で目にした民間芸能についての報告である。芸能者が祭祀の担い手として、社のみならず、開山をも主導する様子を観察することができた。

本来、農村では、祭祀に芸能は不可欠なもので、芸能は神への奉納のためのものであった。それを執り行うのは、100年以上前の平湖では、太保先生であり、その職能には芸能も含まれていた。やがて民国になり、芸能がそれ自体で生業として成り立ったとき、祭祀時には、民間の宗教儀礼を執り行う「太保先生」と鉸子書芸人は分業し、鉸子書芸人は、主に「酬神」のために娯楽を提供し、祭祀の付随的な立場になったであろう。しかし、今日の平湖では、鉸子書芸人が宗教儀礼一切を取り仕切っている。宗教儀礼が演じることによって成り立つものである以上、宗教儀礼にとって演じる行為は必須であった。一方、演じることの専門家である芸能者は、本来、容易に宗教儀礼を演じる（執り行う）者となり得る要素をその職能の中に潜在的に備えていた、といえよう。しかし、文化大革命時の「破四旧」のかけ声は、宗教儀礼を執り行う者を否定し、宗教儀礼に関わってきた伝統的な芸能者を否定した。改革解放の後、民間での

宗教活動が復活し、宗教儀礼を執り行う者と芸能者の両者を必要としたとき、演じることに習熟した者が宗教儀礼を執り行う者を兼ねたのは当然のことであった<sup>22</sup>。鉞子書芸人の再興と今日の状況はこうして成ったのである。

また、徐文珠が演じる鉞子書の演目が宝巻、弾詞や京劇などと密接な関連をもっていることを窺うことができたが、これもまた鉞子書という「小曲芸」の当然の帰結であるといえよう。本来、「芸能自体が、地方で創造されたものは少なく、中央で専業芸能者によって生まれ、流行した各時代の芸能が地方に伝播し信仰の場に定着したものがほとんどである」<sup>23</sup>。これは、日本の芸能についての言及であるが、中国の鉞子書もまた、芸能として形を整えた清末・民国には、弾詞や京劇の隆盛下に発展したであろうし、信仰との結びつきはあったものの、娯楽を主な目的としたものであったろう。そのため、当然のことながら、その土地の人々が好む宝巻や弾詞や京劇の劇目をその中に取り入れざるを得なかった。この意味で、「小曲芸」鉞子書は、芸能として形態を整えた当時から、「受容層のニーズ」を意識し、それらに柔軟に対応しなければ存在しえない運命にあった、といえる。

今日の鉞子書芸人もまた同様である。鉞子書芸人は、時に社を取り仕切り、時に鉞子書を唱い、時に宝巻を宣じ、常に人々の声に耳を傾ける。この、人々のニーズへの柔軟な対応こそが、今日に生きる鉞子書の特徴なのである。

付記。小論は、平成20年度科学研究費補助金基盤研究C「中国近世唱導文藝研究—江南地域における実態調査」(課題番号20520341, 代表 松家裕子<sup>24</sup>)の研究成果の一部である。本調査は、松家裕子氏と共同で行ったが、前掲の張漢勇氏(平湖市戯曲協会元理事)に依頼し、鉞子書芸人徐文珠に許可を得てかなったものである。

---

22 徐文珠は、土地の人々からは「太保先生」と呼ばれることが多いという。

23 三隅治雄『日本民俗芸能概論』(東京堂出版 1972)

24 追手門大学教授